ドラマ遊びにおける不安情動と虚構性への言及行動

藤野友紀

(札幌学院大学)

キーワード: ドラマ遊び, 想像, 情動

Young children's emotion and cognition in drama play

Yuki FUJINO

(Sapporo Gakuin University)

Key words: Drama play, Imagination, emotion

目 的

本研究は遊びの中の認知と情動の関係の発達の解明を目指すものである。藤野(2006)では、ファンタジー的なドラマ遊び(Lindqvist,1995)における虚構性への言及行動(以下、「言及行動」と表記する)に焦点を当て、それが観察された子どもについて、遊びへの参加の仕方に基づいてタイプ分けを行った。言及行動とは、主に「(探検先の月というのは)本当はホールでしょ」「(宇宙研究所の研究員に扮しているのは)本当は先生でしょ」など、遊びの虚構性を現実結びつけるような発言を指す。そのとき分類された5タイプのうち2タイプは、“宇宙研究所の研究員に導かれて月へ探検に出かける”という遊びの展開に対して不安や恐れを抱いていた。今回の分析では、この2タイプに該当する子どもについて、遊びの経過に伴う情動の生起及び変化を追い、それと言及行動との関連を検討する。

方 法

1. 研究対象：札幌市内美晴幼稚園の遊びのワークショップ(プレイショップ)で実施されたドラマ遊びを参与観察した。プレイショップはKODOMO project(石黒他, 2005 など)として週1回の預かり保育時間に実施されている遊びの形成実験(Elikonin,1989)である。実施期間は1学期間(5~7月)、参加者は子ども14名(年長児8名/男女各4/平均年齢5:6;レンジ5:2-5:9, 年中児3名/男2, 女1/平均年齢4:10,レンジ4:7-5:1,年少3名/男2, 女1/平均年齢3:9,レンジ3:7-3:11)、大人9名(幼稚園教諭1, 研究者・院生・学生8)であった。
2. 活動の設定条件：観察期間中のプレイショップは全8回(1回2時間)。第1回はラポール形成と子どもの発達把握のために鬼ごっこ遊び、第2~8回はH.G.ウェルズの『月世界探検』を題材にしたドラマ遊びを実施した。ドラマ遊びの活動概要：学生スタッフ扮する宇宙研究所の研究員2名が幼稚園を訪れ、子どもたちを宇宙探検隊員に任命し、研究所の博士からの依頼任務を言い渡す(研究員は研究所の制服を着て、黒い大きなサングラスを掛けている)。研究所からは適宜、宇宙船の素材や宇宙服が博士のメッセージと共に送られてくる。子どもたちは研究員と共に宇宙に行くためのトレーニングを積み、段ボールで宇宙船を製作し(トレーニングや宇宙船の製作は幼稚園の1階の保育室で行う)、月探検をして基地を発見する(幼稚園の2階ホールを真っ暗にし、ウレタン積木を散らばらせた上にブルーシートをかぶせて月面の岩場を再現している)。なお、月の場所が2階ホールであることは探検前には子どもたちに知らせていない。
3. データ収集方法：参加者全員が収まるようにデジタルビデオカメラ2台を配置し、毎回活動の開始から終了時まで約2時間録画した。ビデオ記録と活動終了後のカンファレンスに基づいてフィールドノートを作成した。本報告では第2~8回の計7回のドラマ遊びを分析の対象とした。

結 果

ドラマ遊びの展開期間に月探検に不安や恐れを抱き、かつ言及行動が見られたのはA児(年長男児), B児(年中女児), C児(年少男児)の3名であった。以下では、この3名における不安・恐れ情動の生起と変化の過程を追い、それと言及行動との関連を記述する。

1. A児の場合

宇宙のビデオ視聴や宇宙歩きには興味を示して参加していたが、自分たちがこれから宇宙に行くために宇宙船を作るという段階になると、不安そうな表情になり、「今日行きたくない、怖い、俺行きたくない」と拒否し、研究員に向かって「ほんとは〇〇先生でしょ」と言及する。宇宙船製作には参加するが、宇宙船が完成して探検に出かけるとなると表情は固く動きは鈍くなり、研究員の傍に来て「〇〇先生」とつぶやき、宇宙トレーニングに参加せずに遠くで見ていた。

2. B児の場合

宇宙に行くための宇宙船のイメージ図を描いた後に、研究員に必死で「…だからね、遠いところ行けない」と言い、自分は宇宙に同行できないと理由づけて伝えようとする。それ以降、日常保育の中でも折に触れて保育者に、宇宙は怖いから行きたくない意思表示し、宇宙船を作る日には参加前から涙をためてしゃくり上げる。宇宙探検に出かける段階でも泣き出し、言葉を発さず座り込んでいる。保育者に促されて仕方なく宇宙船に乗るが、表情も体も硬くしたままである。保育者に付き添われてようよう宇宙に行くが、月面上では降り立って歩く。二度の探検を終える頃には全く不安や恐れが見られなくなり、研究員に「だってホールだもん」と言う。

3. C児の場合

研究員の登場時から表情がこわばり、とうとう泣き出して保育者に抱かれ「こわい…こわい…」と訴える。宇宙トレーニングや宇宙歩きは「(宇宙に)僕は行かない」と拒否して見学に徹し、「(僕ではなくて)先生の宇宙船」という意味づけの下で宇宙船を製作する。だが、宇宙船が完成して月探検に行く段階になると、「やだ」と言いながらも不安な表情は消えて、宇宙歩きや隊員ポーズに参加し、宇宙船に乗り込んで「えいえいおー」と出発のかけ声すらあげる。二度の探検を終えると、大人に対して笑いながら「宇宙行くの楽しくないよ。ほんとの宇宙? ホールの宇宙?」と話しかける。

考 察

B児とC児は不安が解消された後に虚構性に言及するようになったが、A児は不安を解消する手段として虚構性に言及していた。B児とC児の不安情動が未知の状況へのものだったのに対し、A児の不安情動は“本当は〇〇先生だろうが、もしもそうでなかった場合”の想像において生じたと解釈できる。さらに事例を加え、「もしも」の想像展開と情動生起、及び虚構性への言及行動との関連についてモデルを仮設する。
*協力園の教職員と園児の皆様に感謝します。本研究は平成18~20年度科学研究費補助金若手研究(B)の一部として行われた。